

令和5年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

【めざす学校像】児童生徒一人ひとりの「自立と自己実現」に向けて教育実践するとともに、地域社会に対しても「多様性社会の実現」を推進できる学校

* その実現のために、《チーム光陽！つたえる・分かち合う・つながる》を合言葉に、以下の4点について連動させて取り組み、「好循環な学校」を作る。

1. **【基礎】** 安全安心な校内体制構築の実現。～児童生徒の心身の健康と人権を守り、安全・安心に学べる学校～
2. **【実践】** 質の高い授業実践の実現。～主体的な学びを大切に、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた質の高い授業実践ができる学校～
3. **【組織】** 質の高い教員集団の実現。～学校組織として支援教育の専門性を高め、一人ひとりの教職員が学び続け、チームで協働できる学校～
4. **【発信】** 多様性社会の推進と実現。～地域に開かれ、お互いの学びを発信し、すべての人が自分らしく生きていく社会の実現に向けて使命が発揮できる学校～

2 中期的目標

● 「学校経営推進費」を受けた年度(R3)【事業名】「光陽 GoGo プロジェクト～未来の扉を自分で開こう！～」

* 導入機器→「スパイダー」「ベビーロコ」「スヌーズレン関連機器」「SDGs 関連取組の陶芸・七宝焼道具」等。

1.【基礎】安全安心な校内体制構築の実現(安全安心力の向上)～児童生徒の心身の健康と人権を守り、安全・安心に学べる学校～

- (1)「学校生活のあらゆる場面で児童生徒・教職員の人権が尊重される学校」を実践・実現するため、「人権尊重の教育」を推進する。(R3～R5の3年間 取組重点)
- (2)すべての児童生徒の「心身の健康」を守り、すべての児童生徒・保護者・教職員にとって「安全安心な校内体制と医療的ケア実施体制」を構築する。
 - ・すべての児童生徒の「心身の健康」を守るために組織として「報告・連絡・相談・連携」等の体制を維持する。(R5～R7の3年間 基礎基本の再構築)
 - ・人工呼吸器の管理等、高度な医療的ケアも含めたすべての医療的ケアが、安全安心に行えるための環境整備を行い、校内体制を構築していく。
- (3)学校における「危機管理体制」を強化し、事故・事案の未然防止に努める。また、万が一発生した時には、児童生徒・保護者・教職員へのリスクを最低限にとどめる。
 - ・危機管理関係の手引きを社会の変化に対応した形で「学校における危機管理の手引き」や「業務継続計画(BCP)」等を整理・集約し、実効性を追求して改善する。
 - ・「大災害発生時」においても児童生徒・教職員の「命を守る」対応ができるように、「学校防災アドバイザー」等を活用し、組織として準備する。

2.【実践】質の高い授業実践の実現(授業実践力の向上)～主体的な学びを大切に、児童生徒一人ひとりの教育的ニーズに応じた授業実践ができる学校～

- (1)学習指導要領を踏まえた学校全体の「教育課程」について確認し、俯瞰的視点を持って「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」を達成できるように実践する。
 - ・「光陽グランドデザイン」の完成。(R3「めざす児童生徒像」「めざす教職員像」等の確定→R4「各学部教育目標」のつながり等の確定→R5「光陽グランドデザイン」確定)
 - ・「第二次大阪府教育振興計画」「府立学校に対する指示事項」「学校経営計画」「光陽グランドデザイン」「シラバス」「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」をつなげて実践する。「個別的教育支援計画」(R5から新様式)を活用し、「全体から部分」「部分から全体」を常に考えて実践し、個のニーズを実現する。
 - (2)主体的な学びを大切に授業実践(観点別評価含む)を実現するため「研究授業」や「授業振り返り研修会」「教職員間の授業参観週間・交流会」を充実する。
 - ・定期的に学年・学部で話し合い、授業力向上及び授業改善のための大切な観点を共有し、新たな気づきや学びを「明日からの授業」に活用する。
 - ・各教職員の「経験年数に応じた学び」や「教科等に応じた学び」を充実するために、学部を超えて相互に授業観察ができるシステムを構築・定着する。
 - (3)自立活動における専門性の向上を図るための取組を行う。(光陽 GoGo プロジェクトの取組含む)
 - ・GIGA スクール構想に伴う1人1台のタブレットやVRゴーグル・アバターロボット・視線入力装置等のICT機器を積極的に活用し、児童生徒の可能性を広げる。
 - ・スパイダー・移動式スパイダー・移動支援機器・スヌーズレン等を積極的に活用し、自立活動の指導の幅を広げ、充実させる。また、活用の好事例を蓄積する。
- ※上記(3)の取組により、「光陽 GoGo プロジェクト」の「自立活動を中心とした実践」における学校教育自己診断関連質問項目を1年目(R3)・2年目(R4)・3年目(R5)ごとに新設する。各年度の新設項目の肯定的回答率について、教職員・保護者ともに、令和3年度 65%以上(達成済)、令和4年度 70%以上(達成済)、令和5年度 75%以上とする。(R3 教職員 90% 保護者 74%・R4 教職員 96% 保護者 81%)

3.【組織】質の高い教員集団の実現(組織力の向上)～学校組織として支援教育の専門性を高め、一人ひとりの教職員が学び続け、チームで協働できる学校～

- (1)全教職員のスキルアップ研修と次世代育成継承システム(OJT)を充実し、学校組織として支援教育の専門性を高める。
 - ・教職員の研修形態を「全校研修」と経験年数や課題別等の「ニーズ研修」の両輪で展開するため、「光陽研修ライブラリ」を充実し、組織として専門性向上を実現する。
 - ・学年内での日常的な次世代育成継承システム(OJT)を充実し、全教職員が、「内発的な問題解決発想」を持ち、「なぜ」「何のために」のすり合わせを行っていく。
- (2)組織としての「引継システム」を促進する。
 - ・定期的な「整理整頓」の実行をおこない、校務のスリム化を促進する。
 - ・授業の「年間計画」「学習指導案」「教材教具」を整理して「光陽教材ライブラリ」を充実し、効率的に授業準備ができるよう活用する。
- (3)教職員が「教職員としての根幹の業務」に専念できるように「教職員の働き方改革」を推進する。(校務の効率化・労働衛生安全体制の充実)
 - ・教職員が心身ともに健康な状態で児童生徒に向き合い指導・支援するために、全ての教職員が自らの責任を果たし、「働きやすい職場環境作り」を促進する。
 - ・児童生徒・教職員にとって「安心安全な移乗支援」が実現するように、リフト等の導入を行い、多職種チームで検証を行いながら、組織としてリフト活用を推進する。

4.【発信】多様性社会の推進と実現(発信力の向上)～地域に開かれ、お互いの学びを発信し、多様性社会の実現に使命が発揮できる学校～

- (1)「学校間交流」「居住地校交流」等について進化・深化させ、SDGsの視点も取り入れながら、「ともに学び、ともに育つ」教育のさらなる推進を行う。
 - ・「学校間交流」「居住地校交流」について、双方の学びを社会に発信することで、「すべての人が自分らしく生きていく社会の実現」に向けて使命を発揮する。
 - (2)「地域に開かれた学校作り」実現のため、保護者・地域住民・地域小中学校・関係機関との協働を推進し、併せて「支援教育のセンター的機能」を発揮する。
 - ・地域支援については、支援教育コーディネーターに加えて校内教職員の専門性を活用し、学校全体で「支援教育のセンター的機能」を発揮する。
 - ・光陽支援学校の実践を「光陽 GoGo フェスティバル」等で、保護者・地域幼稚園小中学校・地域住民・福祉や医療関係者等へ発信し、連携を充実する。
 - (3)児童生徒・教職員が光陽支援学校の取組み・実践・自らの学びを積極的に発信し、「すべての人が自分らしく生きていく社会の実現」に向けて使命を発揮する。
 - ・教職員は、自分たちの実践について「わかりやすく伝える力」を強化し、「研修会」「実践協議会」等の機会を積極的に活用し、校内外へ発信する。
 - ・児童生徒が「ポッチャ大会」「ロボットプログラミング選手権」「絵画コンクール」「スピーチコンテスト」等の機会を活用し、積極的に挑戦できるよう組織として支援する。
- ※上記(1)(2)の取組により、「光陽 GoGo プロジェクト」の「SDGs拠点校としての実践・発信」における学校教育自己診断関連質問項目を1年目(R3)・2年目(R4)・3年目(R5)ごとに新設する。各年度の新設項目の肯定的回答率について、教職員・保護者ともに、令和3年度 65%以上(達成済)、令和4年度 70%以上(達成済)、令和5年度 75%以上とする。(R3 教職員 94% 保護者 89%・R4 教職員 98% 保護者 84%)

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】 ***太字** は 課題等次年度にむけたキーワード

学校教育自己診断の結果と分析[令和5年 12 月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>回収率 保護者 肢体不自由部門 59%、病弱部門 24% 児童生徒 57%(保護者の支援のもとに回答したのも含む) 教職員 100%</p> <p>・保護者、教職員分について、昨年度までは紙媒体だったが、今年度初めてフォーム作成ツールを活用して実施。保護者分の回収率が前年比肢体不自由微減、病弱 30%減。周知方法、実施方法(フォーム作成ツール以外の方法との併用など)を検討する必要がある。</p> <p>【児童・生徒】 ・10 項目中、肯定的評価(70%以上)は、6項目で、前年と同じだが、85%以上が、昨年度より3項目増。a.先生はわたしたちのことを大切にしてくれていますか、b. 校外学習、学習発表会などの行事は楽しいですか、c. 先生は、わたしたち一人ひとりの得意なことや不得意なことをわかってきていますか。の項目。 a、c:重点的に教員のことば・行動、人権意識を高める取り組みを行ってきたことの成果 昨年度まで「わからない」の回答が多かったが、今年度は一部肯定的意見に変化 b:新型コロナウィルスの位置づけが5類になり、校外活動や行事の復活、活発化による</p> <p>・進路指導や職業に関する項目については「わからない」が一定数存在(R5:42%、R4:36%) 学部によっても差があるが、キャリア教育の観点から日々の授業における意識付けが必要。あわせて質問文を検討する必要がある。</p> <p>【保護者】 ○肢体不自由部門 ・18 項目すべての項目で肯定的評価、肯定的評価 90%以上が 10 項目。 ・「いじめ」の項目、肯定的評価 82.9%(前年度比約5%増)、学校間交流など交流および共同学習の項目、95.7%(前年度比 11%増) 児童生徒の人権に関する項目、行事の項目の肯定的評価増と同じ理由と思われる。 ・将来の進路や職業に関する項目が、例年同様「わからない」の回答が一定ある。(R5:22.9%、R4:23%、R3:21%)。キャリア教育の観点を意識した授業での取り組みの充実や、質問文の検討が必要。 ・「子どもは授業がわかりやすく楽しいと思って受けている」の授業の項目で、肯定的評価がやや減少し(R5:肢 87.1%、病 50%、R4:肢 95%、病 80%)、わからないが増加(R5肢:12.9%、病 16.7%、R4肢:5%、病 15%)している。</p> <p>○病弱部門 ・18 項目中、肯定的評価(70%以上)は、3項目で前年比6項目減。わからないの回答が 30%をこえる項目が8項目、前年比3項目増。 短期入院や、2～3週間程度で入退院をくりかえす児童生徒も多く、学校の取り組みがわかりにくくなっている。取り組みや情報をより多く発信していく必要がある。 ・学校安全、いじめ、人権に関連する項目が肯定的評価 80%をこえており、その点では、児童生徒が安心、安全に学んでいると、保護者に認識いただけていると読み取れる。</p> <p>【教職員】 *前年度は部門別に集計していない。 ・仕事の効率性(データの整理ファイリング)、仕事のスリム化の工夫・改善の項目の肯定的評価が低く(60%程度)、業務改善に取り組む必要がある。 ・特に学校の施設・設備における項目の肯定的評価が減少(R5:55.3%、R4:74%)。施設設備の管理不備による事故があったり、備品台帳の整理のため老朽化している物品を把握する機会があったりしたことが要因のひとつ。施設設備や物品の管理に対する意識が高まったことによると推察される。年度途中より、これまで行われていなかった月1回の安全点検を実施することとした。今後も施設設備や物品の管理・整備を丁寧に行う必要がある。 ・病弱部門において、学校教育に関するもので「わからない」が 50%をこえる項目が2項目(医療的ケア、防犯防災)、約 20%～30%の項目が3項目(いじめ、児童・生徒・保護者の相談体制、学校間交流の項目)があった。病弱教育や分教室での教育の特性や課題が反映されていると考えられる。 ・病弱部門では、児童生徒の主体的な学び、教育的ニーズに応じた授業を行っているの項目で 100%の肯定的評価。病気のある子どもの原籍校復学にむけた個に応じた授業を実施できていることがうかがえる。</p> <p>【学校経営推進費関連】 ・項目すべてにおいて、教職員、肢体不自由部門保護者は肯定的評価 80%以上。 ・病弱部門保護者は肯定的評価 50%、わからないが 50%。光陽 GOGO フェスティバル実施時期に在籍していない児童生徒の保護者もいる中、取り組み自体を知らなかったり、質問内容がわからなかったりしたことが要因であると思われる。</p>	<p>【第1回】 令和5年6月 29 日(水)実施 ○防災 ・地域の「ハザードマップ」の確認を。新森地区は、水に漬かりやすい地域。学校は大丈夫でも、道路が浸水すれば、すぐに保護者が迎えに来られない場合もある。地域として、情報共有しながら防災対策をすすめたい。 ・災害時、家庭に連絡、子どもを引き継ぐ際に、メールで連絡とのことだが、メールが使えないことも想定しておく必要がある。</p> <p>○教育実践 ・病弱部の取り組みが興味深かった。アバターロボットの活用が進んでいる。 ・病弱教育について、ここ数年、各学校で ICT の活用が進んでいるが、ニーズに合わせてロボットの使い分けをしているのは最先端の取り組み。入院中の子どもたちの心理面でのサポートになっている。アバターロボットを使ってみてどのような効果があったか発信してもらおうと他校の参考なる。 ・実践をみんなで共有していくことが、各々の専門性を高めることにつながる。 ・コロナ禍で、子どもたちの筋緊張の状態が変わってきている。自立活動の中で、スパイダーや視線入力など様々な取り組みをされているが、原点に戻り、体のことに視点を当てた取り組みもして欲しい。自立活動の取り組みを発信し地域の小中学校の自立活動も高めてほしい。</p> <p>【第2回】 令和5年 12 月 19 日(月)実施 ○取り組みや実践の発信 ・光陽 GoGo フェスティバル、この活動をもっと地域を巻き込んで実施、発信してほしい。 ・光陽 GoGo フェスティバルで、一緒に来た方が、生徒ももちろんだが先生たちの生き生きしている学校の雰囲気感動したといっておられた。この支援学校の生き生きした姿をたくさんの方々に発信を。</p> <p>○防災 ・コロナ禍で社会全体が停滞し、防災対策も停滞していた。今災害が起こったらどうなるのか予測ができない。防災についても危機感をもちながら、地域とともに取り組んでいただきたい。</p> <p>○教育実践 ・(協議会で提示された)動画や写真を見て、笑顔、悔しさなど感情がたくさん表出されている。子供たちの生活の充実に向けて取り組んでいる様子がよく分かった。参考にさせていただき、教員自らが考えてどう行動していくかを改革していきたい。 ・病弱部のICTについての取り組みが進んでいる。地域では機器や手技にまだ課題がある。光陽の取り組みは全国の病弱部門の学校に影響がありそうだ。 ・移乗リフトが、かかりつけの病院でも導入された。リハビリの場面でも活用されていて、少ない人手で、充実したリハビリがすすめられるとのことだった。</p> <p>【第3回】 令和6年2月 15 日(木)実施 ○第2回授業アンケート ・肯定的な評価が多く、子どもたちの、実態に即した授業が行われていることが伺える。ただし、回収率の差は課題として浮かび上がり、その原因や回収率が結果に及ぼす影響についても検討する必要がある。 ・肯定的な意見が多かったことについては、評価できる。回収率の方法論についても関係していると思うが、さらに改善できるよう課題を浮かび上がらせることが重要。</p> <p>○学校教育自己診断 ・肯定的な評価が多いものとなっており、大いに評価される。課題となるところは継続していくことがよい。肯定的評価の変化に注目することに加えて、「あまり当てはまらない」の割合が多い項目に関して、その理由や改善策を検討していくことも重要。 ・学校経営推進費の項目が、非常に高く評価されている。何年か経ち職員が変わってくる中、どんな目標を立てるのか、それはどんな評価をするのかに立ち戻る必要がある。例えばスパイダーの実践も自立活動として、どんな取り組みをして、目標は何か、どんな項目が関連付けて出されているのか、どんな評価が必要なのか、毎年確認しながらやっていく必要がある。</p> <p>○令和6年度の学校経営計画案 ・高等部を卒業する際、夢を膨らませ、目的を明確にもって社会人になる人はどれくらいいるのか。夢をもって自分のやりたいこと、目標が叶えられる世界に送り出すのは、学校の役割でもあるのではないかと感じた。そのような視点も経営計画に盛り込んでいただきたい。 ・日本の教育は、平均的な偏差値教育みたいに感じるところもあり、支援学校は違う面もあるが、個性をもっと伸ばし、それぞれにあった素敵な出会いで輝けるよう得意分野を伸ばしていけたらいいと思う。 ⇒キャリアプランニングマトリクスを活用して、キャリア教育の観点も意識して取り組むことを計画している。 ・研修ライブラリについては、いつでも検索して見ることができ、新しい先生が入ってきたところに有効である。また、引継ぎ時にも有効だと感じた。 ・令和5年度で評価の高いものほど、質を高く保ち続けられるような取り組みが大事である。できないところよりも、良さを伸ばしていくと自ずと他も(評価の低い部分も)ついてくる。評価の高いところも継続し、全体の評価アップへつなげていただきたい。 ・専門性と、組織力、発信力については連動している部分がある。</p>

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標 [R4年度値]	自己評価
1 安全安心力の向上 【安全安心な校内体制構築の実現】	(1) 人権尊重の教育推進	(1) ・教職員の人権研修として、「ファシリテーションスキル」「アサーティブコミュニケーション」「アンガーマネジメント」等、健全な同僚性構築に必要な様々なコミュニケーションスキルを3年計画で学ぶ。(3年目の取り組み) ・児童生徒に使用する「ことば・行動」と同僚間で使用する「ことば・行動」の質を高める。	(1) ・全校研修1回で外部講師招聘。 ・毎月の学年会等を活用して、「ことば・行動」について振り返り、課題ケースは即時対応。 ・学期ごとに好事例等をまとめて実践に活かす。	(1) ・8月に全校研修実施。「人権の視点でコミュニケーションを考える」(栗本 敦子 氏)。事後アンケート「日々の実践に活かすことができる」の項目で肯定的評価 85.7%。(○) ・学年会で、「良くなってきたこと」「気になること」「今後取り組んでいきたいこと」を意見集約し、学部会で共有。「ことば・行動」の質をより高める取り組みを継続。(○)
	(2) 心身の健康を守る教育の推進	(2) ・児童生徒のいつもと違う姿は、報告・連絡・相談の徹底。インシデント・アクシデント生起時は、「正確な事実確認」と「原因分析」「具体的な改善策」をチームで迅速に対応。 ・安全安心な医療的ケア実施体制構築に向けて、教員と看護師の協働実践をまとめ、校内研修会で事例発表する。(助言者として外部講師を招聘する。) ・高度な医療的ケアを安全に実施するために定期的な緊急対応シミュレーションの実施。(バリエーションを増やす)	(2) ・インシデント・アクシデント生起後、必要に応じて症例検討。確認事項は、朝礼等で全体共有。 ・教員と看護師の協働実践1事例を教職員研修として実施。外部講師招聘。 ・新しい想定緊急対応シミュレーションも含めて年6回。[3回]	(2) ・インシデント・アクシデント生起時は、チームで迅速に対応。原因分析をする中で、事故を未然に防ぐためにチームで安全点検の徹底を始めた。(○) ・助言者として医師を招いて人工呼吸器を必要とする児童生徒3名の教育実践について「医療的ケア実践報告会」を実施。(○) ・年6回実施。学部毎に想定される緊急対応のシミュレーションや、ミニ講義で知識や技術の向上をはかった。(○)
	(3) 危機管理体制の強化	(3) ・「危機管理体制」を強化し、事故・事案の未然防止に努める。また、万が一発生した時には、児童生徒・保護者・教職員へのリスクを最低限にとどめるために、模擬訓練を実施。また、「業務継続計画(BCP)」をアップデートする。 ・「大災害発生時」においても児童生徒・教職員の「命を守る」対応ができるように、「学校防災アドバイザー」等を活用し、組織として準備する。	(3) ・「大災害発生」を想定した模擬訓練(関係機関含)実施1回。 ・「学校防災アドバイザー」からの助言年3回。 ・ポータブル電源ソーラーパネルの購入。 ・地域関係者との連携会議年5回。	(3) ・関係機関を含めた模擬訓練は、調整が間に合わなかったため実施できなかった。(△) ・文科省の相互教育政策局「学校安全実践力サポート事業」避難確保計画合同相談会や旭区役所防災安全課により、「大災害発生時」に、避難所開設も含めて組織として準備しておくこと等を助言いただき、「業務継続計画(BCP)」を見直した。(○) ・1月に地震津波訓練を実施し、津波を想定した2段階の避難経路を確認できた。また、本校で初めて大災害時を想定した「児童生徒引き継ぎ訓練」を教員が保護者役、児童生徒役となり、実施した。教職員の防災意識、共通理解を深めることができた。(○) ・地域関係者との会議を1回開催。(△)
2 授業実践力の向上 【質の高い授業実践の実現】	(1) 個のニーズの実現	(1) ・R3年度作成の「めざす児童生徒像」「めざす教職員像」、R4年度作成の「各学部育てたい力」を俯瞰的にまとめて「光陽グランドデザイン」を完成させる。 ・「個別の教育支援計画」(R5から新様式)を活用し、「全体から部分」「部分から全体」を常に考えて実践し、個のニーズを実現する。	(1) ・「光陽グランドデザイン」の完成と活用。 ・「個別の教育支援計画」新様式運用開始。1学期末に調整。	(1) ・「光陽グランドデザイン」を日常的に「見える化」できるように職員室に掲示、全教職員に配布。毎月の職員会議で、校長よりめざす学校像、児童生徒像、教職員像について全教職員に向けて再確認、周知を行った。(○) ・「光陽グランドデザイン」を活用して、「光陽キャリアプランニング・マトリックス」作成に向けたワークショップを全教職員で実施。キャリアの視点を踏まえた指導について、全学部でアイデアを出し合い、完成した。3月に担当首席より周知、説明をおこなった。(○) ・個別の教育支援計画新様式の運用を開始し、児童生徒の情報が一括で確認できるように改善された(○)
	(2) 質の高い授業実践	(2) ・「授業振り返り研修会」「教職員の授業参観週間・交流会」を実施し、学びを「明日からの授業」に活用する。 ・授業「光陽いいとこ集め」を蓄積する。 ・10年経験者研修等を活用した「公開研究授業」を実施し、モデルリーダーとしての授業改善を進める。 ・質の高い授業作りのため、全校研修会で学び、授業改善につなげる。 ・1人1台端末の導入を受けて、「アクションプラン」を見直し、ICTを効果的に活用した授業実践を累積する。	(2) ・「授業振り返り研修会」1回と「授業参観週間等」1回の実施。 ・「光陽いいとこ集め」を継続し、首席から各学部会にて共有。 ・「公開研究授業」3回以上実施 ・外部講師招聘による「全校研修会」1回実施。 ・「ICT実践報告会」(4事例)	(2) ・授業振り返り研修会、授業参観週間を1回実施。10年経験者研修等を活用した「公開研究授業」を9回実施し、地域の教員に向けて発信できた。(○) ・「光陽いいとこ集め」を学部会で共有し、明日への授業のヒントや、リフトを活用した実践を校内に広める機会となった。(○) ・全校研修「教材の活用について」(講師：羽曳野支援 教諭)を実施した。(○) ・ICT実践報告会を2月に実施。4例の報告を行った。(○)
	(3) 自立活動の充実	(3) ・「光陽 GoGo プロジェクト」自立活動の実践で、3年目の取り組みを進める。移動式スパイダーや移動支援機器・スヌーズレン・アバターロボット等の機器を積極的に活用し、児童生徒が自ら外界へ関わる力を伸ばし、社会へ参画する機会を増やす。(メタバースの教育的効果も活用。)	(3) ・「光陽 GoGo プロジェクト」自立活動の実践で3年目のまとめ。 ・学校教育自己診断の関連項目教職員・保護者とも肯定的評価 75%以上。	(3) ・「光陽 GoGo プロジェクト」最終年の取り組みとして、「スパイダー」「ベビーロコ」「スヌーズレン」の実践を各学部で深めている。12月と2月に「スパイダー報告会」で実践事例を報告。(○) ・「光陽 GoGo フェスティバル」では昨年度(111名)を上回る、260名が参加。本校の取り組みを体験、参加者からは肯定的評価 100%のアンケートを得ることができた。学校教育自己診断の関連項目、病弱保護者は目標に達しなかったが、教職員・肢体保護者とは肯定的評価 75%以上、[教職員肢:99%、病:93.8%、保護者肢:80% 病 50%](○)
3 組織力の向上 【質の高い教職員集団の実現】	(1) 教職員の専門性向上	(1) ・教職員の研修形態を「全校研修」と経験年数や課題別等の「ニーズ研修」の両輪で展開するため、「光陽研修ライブラリ」システムを構築する。 ・学年・学部内での日常的な次世代育成継承システム(OJT)を充実し、全教職員が、「内発的な問題解決発想」を持ち「なぜ」「何のために」のすり合わせを行っていく。(学年会や学部研修会の充実と活用)	(1) ・「光陽研修ライブラリ」を立ち上げ、現存する研修データをカテゴリ別に整理。 ・今後、専門性向上のために蓄積していきたい研修内容のニーズを把握し、計画を作成。	(1) ・クラウド型ウェブページ「光陽研修ライブラリ」を作成。現在各部署が保管していた、今までの研修動画や資料を当サイトに保管し、研修内容によってカテゴリ分けし、活用しやすいものにした。 ・随時サイトへのアップを続ける(○) ・計画作成には至っていない。が、校内研修実施後にアンケートをとり、ニーズの把握は行ってきた。(○)
	(2) 引継システムの推進	(2) ・定期的な「整理整頓」を行い、校務のスリム化を促進する。5S(整理・整頓・清掃・清潔・躰)+S(支援)の実行。 ・授業の「年間計画」「学習指導案」「教材教具」を整理して「光陽教材ライブラリ」を充実し、効率的に授業準備ができるよう活用する。	(2) ・産業医による校内の「5S+S」の状況評価。(年3回実施) ・現存する「視覚支援教材」をカテゴリ別に整理し、「光陽教材ライブラリ」として活用する。	(2) ・学期に1回校内巡視。年3回実施し、産業医よりアドバイスをうけた。(○) ・クラウド型ウェブページ「光陽教材ライブラリ」を作成。学部ごとのページ内に授業ごとの視覚支援教材(プレゼンテーションソフトで作成したものなど)や自作教材データを保管できた。引き続き各授業で随時データをアップしている。シラバスとの関連付けも行う方向で作業を進めている。(○)
	(3) 教職員働き方改革推進	(3) ・教職員が心身ともに健康な状態(Well-being)で児童生徒に向き合い指導・支援するために次の3点を意識して「働きやすい職場環境作り」を促進する。 ①「仕事の時間を区切る」(毎週水曜日全教職員定時退勤) ②「仕事のスリム化を行う」(ICTを活用した校務の効率化) ③「仕事の仕方を変える」(発想の転換・業務連携) ・「児童生徒・教職員にとって安心安全な移乗支援」が実現するようにリフト等の導入を行い、多職種チームで検証を行いながら、組織としてリフト活用を推進する。	(3) ・毎週水曜日全教職員定時退勤の実行。 ・フォーム作成ツールを活用した欠席等連絡の実施。 ・保護者配付文書の一部デジタル化。 ・リフト活用の成果を「児童生徒」と「教職員」の両面から整理をし、安全衛生委員会で集約。	(3) ・毎週水曜日定時退勤を校内放送および職員朝礼で周知。欠席連絡に加え、緊急連絡フォームを作成し活用した。(○) ・安心メールを活用して、配布文書の一部をデジタル化配信した。授業アンケート、学校計画自己診断アンケートはフォーム作成ツールで実施。集計作業がスリム化された。(○) ・年度はじめに各学部でリフト活用場面を想定した教員向け研修実施。リフトを扱う専門業者と連携し、光陽 GoGo フェスティバルにてブース運営したほか、随時活用における相談等を行った。(○) ・普段の移乗場面だけでなく、自立活動の場面や修学旅行事前学習(アトラクション体験)などでも活用し、安全衛生委員会で十分に集約できなかった。活用の集約以外は、目標を達成できなかった。(○)

府立光陽支援学校

<p>4 発信力の向上 【多様性社会の推進と実現】</p>	<p>(1) 交流および共同学習の充実</p>	<p>(1) ・「学校間交流」「居住地校交流」について、実践を充実。「出前授業」を行い、交流後の「相互の学びや気づき」を校内外に発信する。 ・「SDGsの視点や取組み」を交流校間で発表しあう。 ・「届けよう服のチカラプロジェクト」3年目の取り組み実施。交流校や地域とも協働して取り組む。</p>	<p>(1) ・「対面交流」「オンライン交流」を併用して、学びを深める。 ・SDGs プレーヤーとして交流校と発表の機会を作る。「届けよう服のチカラプロジェクト」協働校等、3校。</p>	<p>(1) ・障がい理解についての出前授業を実施し、互いを知り、理解しあう交流につなげることができた。相手校にも好評。対面交流、オンライン交流を実施できた。(○) ・相互の学びや気づきを、校内では感想文を掲示する等して発表、校外へは本校研究紀要で報告して発信した。(○) ・SDGsプレーヤーとして、交流校(4校)に「“届けよう、服のチカラプロジェクト”」の協力を依頼。今年度は、小学部を中心に、服の回収箱や呼びかけポスターを作成し、3年間で最多の服(1500枚)を回収。校外での発表の機会は設けることができなかったが、目標はおおむね達成。学校教育自己診断の関連項目では、病弱保護者は目標に達しなかったが、教職員・肢体保護者とは肯定的評価 75%以上、〔教職員肢:99%,病:93.8%、保護者肢:88.5% 病 50%〕(○)</p>
	<p>(2) 地域に開かれた学校作り</p>	<p>(2) ・「授業実践・教職員研修」について積極的に地域へ公開(オンデマンド研修等)するとともに、コーディネーターによる地域支援も含めたセンター的機能を発揮する。 ・「光陽 GoGo プロジェクト」の取り組みや本校の実践を保護者・地域小中学校等・福祉事業所関係者・医療関係者等へ発信し、センター的機能を発揮する。</p>	<p>(2) ・「夏季公開研修」を3本実施。 ・「光陽 GoGo フェスティバル」の開催(2日間) 学校教育自己診断の関連項目 教職員・保護者とも肯定的評価 75%以上。</p>	<p>(2) ・夏季公開研修を3講座(自立活動、地域支援、病弱教育)実施し、受講者のアンケートでは、肯定的評価 90%の高評価を得た。(○) ・センター的機能発揮に関する、学校教育自己診断の関連項目、病弱教育部門は目標に達しなかったが、肢体不自由部門は肯定的評価 75%以上、〔教職員肢:85.4,病:56.3%、保護者肢:78.6% 病 50%〕(△)</p>
	<p>(3) 実践の積極的発信</p>	<p>(3) ・教職員は、自分たちの実践について「わかりやすく伝える力」を強化し、「研修会」「実践協議会」等の機会を積極的に活用し、校内外へ発信する。 ・児童生徒が「ポッチャ大会」「ロボットプログラミング選手権」「絵画コンクール」「スピーチコンテスト」等の機会を活用し、積極的に挑戦できるよう組織として支援する。</p>	<p>(3) ・研究会等校外で実践発信。学校(個人・グループ)から3実践は、校外へ発表。 ・従来の大会参加に加えて、新しく「未来を見通すコンテスト・ブレゼンカップ」への参加。</p>	<p>(3) ・本校の教育実践を大阪市(教育委員会、保健所)や関西教育 ICT 展、教職をめざす大学生、看護学生等へ発信し、支援教育の理解推進を積極的に行った。(14回)(◎) ・ポッチャ甲子園予選で全国5位に入り、決勝の東京大会に進んだ。メンバーのうち1名は大阪市障がい者スポーツ大会で優勝して大阪市代表となり、鹿児島で行われた特別全国障がい者スポーツ大会に出場した。(◎) ・「未来を見通すコンテスト ミラコンブレゼンカップ 2023」で大阪代表に選ばれ、近畿地区で2位優秀賞を受賞。 ・ロボットプログラミング選手権に参加することで、入院中においても、全国の病気療養中の児童生徒と時間や場所を共有し、達成感や自己有用感を味わうことができた。(◎)</p>